研究報告

美術グループ研究報告作品展「GoldenRound 2017」報告

林　　亨[1)]　大井　敏恭[2)]　末次　弘明[3)]　塚崎　美歩[4)]　山崎　正明[5)]

1）北翔大学教育文化学部芸術学科　2）北方圏学術情報センター研究員　3）北海道教育大学岩見沢校
4）北方圏学術情報センター研究員　5）北翔大学教育文化学部教育学科

抄　録

本稿は，2016年度に「ポルトギャラリー」（本学北方圏学術情報センター内）において開催した本研究グループ主催による展覧会・ワークショップ・シンポジウムの概要報告である。これまで，本誌６号から８号まで掲載してきた研究報告に続くものである。制作者と鑑賞者，そしてその両者をつなぐ場を提供する企画者が協働することによって，アートを核とした運動体が魅力ある社会貢献となるための可能性を示した。

本研究を通じて，作品を制作することの各々の意義が再確認され，地域社会への肯定的影響という側面からの展覧会の果たす役割についてその可能性が示唆された。

キーワード：美術作品，制作過程，メディウム，対話，鑑賞

Ⅰ．は じ め に

本研究プロジェクトは，「美術と社会の連動の試み－現代アート制作の今日的意味の考察」と題した研究テーマを掲げ，平成22年から研究を行ってきたが，昨年度のポルト研究全体の体制変更を契機に，社会の連動に加えて学校との連動についての研究内容を加えて改編した。研究テーマを「美術と社会並びに学校との連動の試み－現代アートにおける美術教育的視点の考察－」とし，美術教育の研究者を加えた。本報告は，３つの研究の柱のうち，①制作表現研究と，②鑑賞システム研究に関連する事業の報告である。

本研究ではこれまで塚崎美歩（インディペンデント・キュレイター）が企画を務め，３つの展覧会を開催し，大井敏恭，林亨，末次弘明の３作家による近作を紹介してきた。４年目となる本年度は，「北海道のアート状況」をテーマとしたシンポジウムと鑑賞ワークショップを開催し，本プロジェクトの課題のひとつである，絵画のメディウム（媒材）についての理解を深める契機とした。各制作研究のこれまでの成果が凝縮された展示となり，鑑賞者からさまざまな評価を得た。

会期中の展示室においては，山崎正明をファシリテーターとする対話による鑑賞ワークショップを行った。継続して参加している来場者も複数いて，作品を深く読み込んだ意見が多数あった。さらに，今回はその後に引き続き，北海道新聞記者で美術ジャーナリストの梁井朗氏を招いてギャラリートークも実施した。北海道の美術状況の分析をふまえて本研究の意義について話し合った。

写真１　鑑賞ワークショップの様子

Ⅱ．研究報告作品展「GoldenRound 2017」の概要

１．タイトル「GoldenRound 2017」
２．会期　2017年３月４日（土）～26日（日）
３．場所　北翔大学北方圏学術情報センター　ポルトギャラリーA
４．展覧会企画コンセプト

「Hello darkness，今日のニュースでは，最新のテクノロジーが生身の知性よりもはるかに先鋭な直観を開発

したと報じられたらしい。私の頭の中には，いまだ言葉にならないイメージの揺籃。矩形の窓から差し込む光は煌めくけれど，この部屋の小さな陰影に何を映せばよいのだろう。そしてこれからも絵画は続く。公園に朽ちた遊具ジャングル・グローブを見いだして，そこにエネルギーの充実とそのグローバルな循環のたわみを読み取り制作してきた林亨は，いま最新の科学技術における技術的特異点に新たなエネルギーの喧騒を見出している。大井敏恭の作品のなかでは，言葉の形をとらない思考mentaleseが，絵画を通して響くように表現される。エナメル質の桎梏で心電図のリズムを刻み音楽の波を描いてきた末次弘明は，絵画材料の薄闇に目を凝らし，そこに新たな光を見出そうとする。彼らの絵画におけるゴールデン・ラウンドは，この地からそれぞれに輝く軌道を描き，絵画をめぐる新たな旅となるだろう。（塚崎美歩）」

本研究の成果報告展は，これまで４回開催し，いずれも，各研究員の個別の制作研究成果報告という意義を持つものであった。しかし，展覧会全体のタイトルと内容を表すコンセプト文は塚崎研究員が中心となってに作られた。研究グループが共有する共通テーマや３人の作品から抽出された言葉などを紡いで，展覧会コンセプトが作られてきた。以上の文章が今回の展覧会コンセプトである。

５．ワークショップ「対話による鑑賞―みる人がアートを作る―」（ファシリテーター：山崎正明）（写真１）
　日時　2017年３月26日（土）13：30～15：00
　場所　北翔大学北方圏学術情報センター　ポルトギャラリーＡ

６．アートよもやまばなし「北海道美術ネットの梁井朗氏と参加メンバーとのギャラリートーク」（写真２）
　日時　2017年３月26日（土）15：00～16：30
　場所　北翔大学北方圏学術情報センター　ポルトギャラリーＡ

写真２　「アートよもやまばなし」の様子

Ⅲ．制作表現研究報告

前述したように，本報告の中心的内容は，制作研究報告である。以下，報告展覧会に出品した３人の研究員のそれぞれの報告文を掲載する。

１．イメージと記憶　視覚的意味を形成する根源の混沌

大井　敏恭

絵画の作り手が自作について文字を使って語るのは当たり前のようで実に奇妙だ。視覚を言語で，長さを重さで表現するような気分でもあるし，さらに問題は，自分で自分を語る構図は神話の図式に似て，蛇が自分を尾から飲み込んで最後に頭も飲み込めるのだろうか，という疑問が生じる。文字で絵を描く事は相当難しいか不可能に近いだろう。作品と交差する事はなくても平行するように，昨年から今年2017年２月にかけて，やっと終着駅にたどり着いた５点の作品についてなんとか書いてみよう。

この５点に共通して単純に言えるのは，一見，何とも混沌としていることだ。ちょうど子供が白い画用紙に絵を描くときのように，気に入った事物を好きな場所に描くように広がっている，画面が限りなく広がっているとすばらしいと思うけれど。しかも以前に描かれたイメージに重ねて描くものだから地層のように何層にもなってしまう。あちらこちらに沈んだイメージが見え隠れし，そのかけらも残っている。絵の中に地層のように時間が堆積する。とは言え，これらが完全に偶然の選択と出来事から成り立つように意図している訳ではない。絵の具の層に埋もれほとんど見えなくなったイメージを部分的に掘り起こしたり，移動したり，色彩を変えたり，僕の思惟を介在させ構造的な意図にも配慮するけれど，お粗末なアイディアのせいか，なかなか納得できる状況にはならない。確かに偶然の直感的な選択が，形容矛盾になるけれど，自分では選択しないような事をやってしまう結果，驚くような新たな道を見せてくれる場合もある。

自分の作品に近い気になる言葉が２つ思い浮かんだ。

＊　Mentalese

a hypothetical mental system, resembling language, in which concepts can be pictured and combined without the use of words

（言語に似ているけれど，言語を使わずに，概念が想起され組み合わされるような仮説的な心理的体系）

＊　Metacognition

awareness and understanding one's thinking and cognitive processes ; thinking about thinking

（人の思考と認知プロセスを意識的に考え理解する，考

える事を考える）

1）「徒然夢　夢の中で」（写真３）

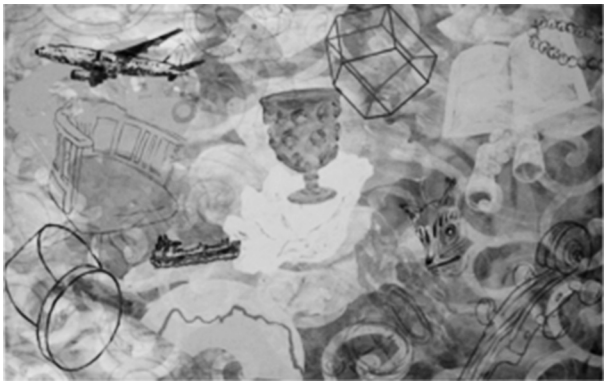

写真３　「徒然夢　夢の中で」
acrylic on canvas 100cmx158cmx6cm 09 2016 Yuni

さめない夢の中にいるように，様々の出来事に出会いながら，僕は時間のまっただ中を航行しているけれど，知っているのだろうか，どこにいて，どこに向かっているのか。多くの体験と間違い？を塗り重ねて，一瞬もとどまる事なくここを通過しているけれど，以前より少しは見晴らしは良いのだろうか？経験は積んだはずだが未だに遠方はただ青くかすんで靄の中。

今日は薄曇り時に小雨，蒸し暑い夏の大騒ぎはまだ身体に残っているけれど，朝夕涼しくなった。僕の仕事の進展は相変わらず草木の伸びるほどに，のろい。やっと９月の初旬にこの仕事は止まった。そしてはじめてこの絵を観客として鑑賞したのだ。昔から今に至る様々の出来事，物事が散在し脈絡もよくわからない。なにか意味をなしているのだろうか，それともそれ以前の混沌なのだろうか，表象となったこれらにはどこかで出会っているけれど互いにどのように繋がっているのか解らない，だが，これらを結んでしか僕は在りえない。

この小さなタンカーはサンフランシスコのスタジオの南の高台から見下ろす湾で，沢山の倉庫の屋根の上の空に浮かんでいたのだ。飛行機は毎日，僕の由仁の仕事場のほぼ真上を大きな機体を傾けて左旋回し，車輪を出して着陸態勢に入る。狐には時々出会うし，狐の面は確かに不思議な力を発していて近所の古物屋さんで出会った。この絵に登場するのは皆，僕の知り合いなのだ。いずれにせよこの絵を見る僕以外の人は，何をそこに認めるのか知りたい。

舞台裏の作者の視点で見つめると，あからさまな舞台装置，頼りないか細い線，ぎこちない造作，こんな素人の一人で何役も演ずる田舎芝居で良いのだろうか，これが僕の出した貧相な答えなのか，もしかするとこれから述べる点からして全て黒子が演ずる人形芝居かもしれない。

昼と夜，現実と夢，意識と無意識，記憶これらは大昔から人々を動機づけ，動かし，そして惑わしてきた。世界中で様々に解釈され，歌われ，神話や宗教が形成された。現代のビリーフシステムは国家，政治，経済，社会，などと呼ばれ僕らはそのルールに従って泳いでいる。このフィクションの主体，仮にも主人公であるはずの僕らをさらに混乱させるかのように，自由意志（ free will ）の存在さえ，そうとう疑わしくなっている。意識すると言うけれど，一体誰の意識なのだろう，意志と言うけれど，一体誰の意志なのだろう。さらに言葉の上では，意識，無意識の存在と意味が明白に弁別されているように聞こえるけれど，それほど簡単ではないように思う。僕らは二つのまるで違った世界を行き来しているのだろうか。そうでは無い事がらが見つかっている。

巨大な壁のような現実と思われる現代社会が実は自分たちが作り出した，そこで生きる架空の頼りない物語だとすれば，そして追い打ちをかけるように物理学や天文学の分野で記述される経験的理解を超える不可解な世界が実体であるとすれば，僕らの日常は一体なんでできているのだろうか，自分もその足元もあまりにも頼りない。

2）「玉手箱」（写真４）

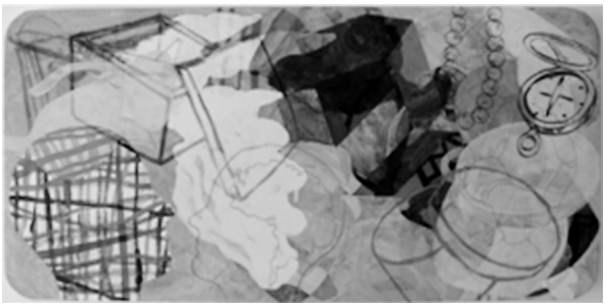

写真４　「玉手箱」
acrylic on canvas 52cm x 108cm 01 2017 Yuni

絵の中に，逆さまに落ちてゆく木偶人形，僕がまだ何も知らなかった，まさに無知だったその昔，日本の南の島の浜からもってきた白く重い貝殻がある。気がつくと日常の些事に振り回されて，何かしていると勘違いしながら無為のうちに大変な時間が流れ去ってしまった。蓋の開いた玉手箱に閉じ込められていた時間は白い煙となって僕を押しつぶすのかもしれない。青いグラスを光にかざすと世界はその中に沈んだ。人は本当に互いに理解し合えるのだろうか，二人の頭が自分が自分である事を意識しながら向かい合っている。本当に世界は僕らの頭の中で造られたのか，それはとても小さくて窮屈だからそうでなければ良いのだけれど，誰も答えてはくれな

い。この画面に最初に描き込んだマルセル・プルーストの肖像はしだいに埋もれてしまったけれど，彼の言葉に親しみを感じ，気に入っていたのだ，
“…only that which bears the imprint of our choice, our taste, our uncertainty, our desire and our weakness can be beautiful”

英訳をさらに意訳するが，「私たちの，選択，好み，不確かさ，欲望，弱さの証を背負う物のみが美しい」この一文は僕の仕事の在り方を認めてくれているような気がしたのだ。自分の思う表現とそれに沿うプルーストの言葉に依拠しながらも，どこかでしかし，これで良いのか？と厳しい言葉がきこえる。疲れて行き止まる。仕事場の向こうのもはや日が落ちてすっかり暗くなった雪の平野を，遠く連なる列車の明るい窓が音もなく南に向かって走る。これに乗ればきっとどこかに行ける。あるいは，僕ら人間の存在には目的もゴールもなくその方向さえ，確率の問題でしかないとすれば，どこに行けるのだろうか。羅針盤が進むべき方向を示してくれるだろうか。

3）「北の島，南の島」（写真５）

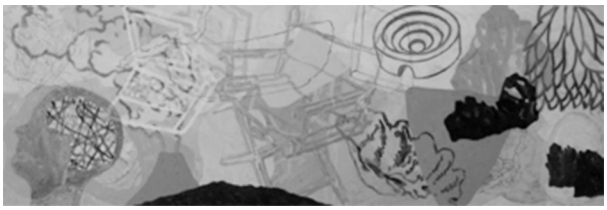

写真５　「北の島，南の島」
acrylic on canvas 60㎝ x 180㎝ 02/ 2017/ Yuni

二月，雪がふり，雪がとけ，また雪がふる，そして今日は雨，目まぐるしく変わる春の兆しなのか。

３年ほど前に止まった絵がまた動き出した，露出した地層から様々の痕跡や埋蔵物を探り検証する，止まった時点を確認する。そこから再度の冒険を試みるのだ。僕の中の時間，忘れていた何かを呼び起こす周辺の雑物，収拾物が脈絡もなく散在ししだいに堆積していく。北の島，今，北海道で体験している様々な出来事，南の島オアフで，溶岩が固まったばかりの黒い海岸を巡った記憶。しかしながら，小さな記憶の部屋にだけ閉じ込められるのは息苦しい。今流れる時，現在を招き込む窓口も欲しい。自己主張する幾つかの性格の線やこれに絡んで，メディウムがキャンバスのうえで引きずられる痕跡や量塊そして色彩の織りなす目前の現在のフィールドが形象の輪郭をなぞって，僕の記憶の引き出しを開けオーガニックな全体の構造を造ってくれる。この二つの主題が絡まりながら喚起する情動が織りなしてくれる風景は，僕に様々の謎を問いかけてくるが，その答えを知らない。

4）「花菖蒲　アイリス」（写真６）

写真６　「花菖蒲　アイリス」
acrylic on canvas 50㎝ x 60㎝ 03　2017 Yuni

絵画は時間的にも空間的にも一元的な統一性とバランスがとれている事で，定義が難しい言葉ではあるけれど”美しい”と考えていた。しかし，二元的どころか多元的に展開する画面もまた異なった均衡と美しさを見せる事を遅まきながら体験しもはやそこに留まってはいられなくなった。

作品の進展過程で，イメージは平面的にも展開するが，長い時間軸の方向にも進むものだから最終的に２次元の平面としての広がりに統一性が生まれるかどうかは危うい，それが目的となってしまうのであれば，むしろ無くても良いのかもしれない。均衡と不均衡の間でリスクをはらんだ調和と緊張のほうが僕にはのぞましい。

父親が残した家族の沢山の写真が手元に残っている。そこに映った人々，幼い自分を含めて，彼らはもういない，手掛かりは残された記憶しかないのだが，これらの写真を見ていると懐かしさとそれ以上に強い喪失感がわきあがってくる，彼らは一体どこに行ってしまったのだろう。

毎年夏になるとアイリス，花菖蒲が今住んでいるスタジオの庭に咲く。この家族の肖像は数年足踏み状態だったのだが，何か最終楽章のコーダに駆られるように突然このアイリスのドローイングを描き込んだ。その後で，思い出したのだ。僕の顔の正面で大きな花がまるで初めましてと挨拶するように微笑んでいるのだ，明るい緑の葉も茎も細く高々と伸び上がり，自分と同じくらいの背丈の黄色い花が咲く花畑の中を花に魅せられて頼りなく歩き回った，様々に輝く色彩や驚くような細部のつくり，それらはこの世にあらわれた新参者に微笑んでくれ

た。どこかに行ってしまった遠い夏のある日，確かに地上に楽園はあったのだ。2017年４月26日にこの絵は終点に到着した。

西洋音楽の古典的文法世界では当たり前の話しだが，主題，第二主題，再現部などは時間の流れのなかに組み込んで行けるし，同時に２声３声が絡み合って歌う，あるいはフーガのように時差で追いかける，対位法など，そして順行と逆行，しかもそれらが同時展開，全く絵を描く人間にはうらやましいかぎりに手立てが豊かに進化していた。一方，僕の「アイリス」は第二主題のドローイングでの展開で一挙にコーダがはじまり問答無用に終結した，不思議な音楽？。思うにこの二つのテーマは無意識の中ですでに出会い結びついたのだ，前述したようにその事は後で解ったのだから。

２．2016年度の制作について

末次　弘明

絵画におけるメディウムのもつ役割や，視覚的効果についての関心が高まり，様々な性質の顔料に水，土，膠などの自然素材と化成物質を多様に組み合わせた制作を始めて2017年で５年目を迎える。それまではいわゆる油画やアクリル画，もしくはそれらの混合技法として制作を行ってきたが，それらの描画材とは視覚的にはもちろんのこと，嗅覚，触覚，味覚（2014年由仁実験芸術農場で開催された膠のワークショップに於いて魚の内臓で作られた膠を試食）で大きな違いがあり，そのことが作品に大きく影響したり，またはその組成を意識した主題の作品となって現われたりもした。この経過の中で，絵画制作というものが芸術のための絵画ではなく，私という人間が生きていく中で自発的かつ受動的にもたらされていく営みであることがあらためて確認され，その思いは時の経過とともに強まっている。様々なモチーフや素材との出会い，そのことを共有し，学びあい伝えあう人々との出会いが，5年という時間の中で私の制作に大きく働きかけ，私自身としては作品を育て，よい影響を与え続けていると考えている。このような考察，研究を行う機会を与えてくれる現在の環境に改めて感謝したい。

さて，2016年度の制作の始まりはやはり素材研究の中からもたらされた。アキーラ[1)]に見られるような水性と油性のエマルジョン的成分融合を自前で行うために，油分と水分を界面活性剤で融和し絵具を作る取り組みは４年前の制作シリーズ「Babylon」から取り組んでいることだが，その経緯で，さらに強い発色と粘度を持つ顔料を必要とする構想が立ち上がった。それが「Newsong」シリーズである。「人間」をテーマに制作することは2011年から変わらないが，人間も自然も激しく移ろうなかで自分なりの思索の経緯と直感を元に制作することで，その都度現われてくる作品のフォルムも激しく変化する。抽象的な表現になるが現在のテーマのようなものを言葉にすると，『私はいまだ暗闇（もしくは盲目的白昼夢）を手探りで進み，立ち留まり，蝋燭の灯火に心を休め，息を殺して念を飛ばしながらゆっくりと前へ進んでいる。心臓の音が聴こえる。』ということになるが，この『心臓の音』を作品にすることがミッションとなった。その表現のための絵具作りのなかで，前述のような絵具の特性が必要と考えた。配合の詳細はここでは記さないが粘性，発色，乾燥時の光の反射率の高い（つやのある）絵具を目指し顔料とメディウムを合成し作成した。支持体もそれにあわせ，まずは幅広（200＊100㎝）の木枠を２点作成（写真７・８），生（なま）生地の麻キャンバスを張り，周囲に少し隙間を空けた白木の額装を施す。このスタイルがその後のシリーズの基本構造となっ

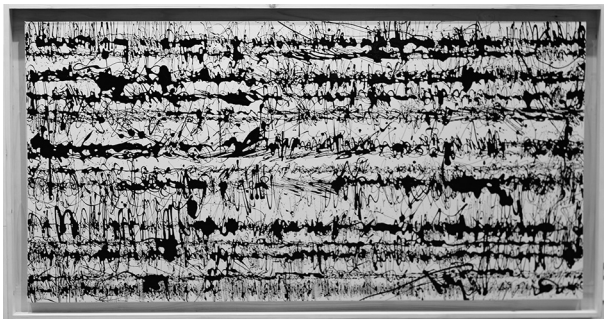

写真７

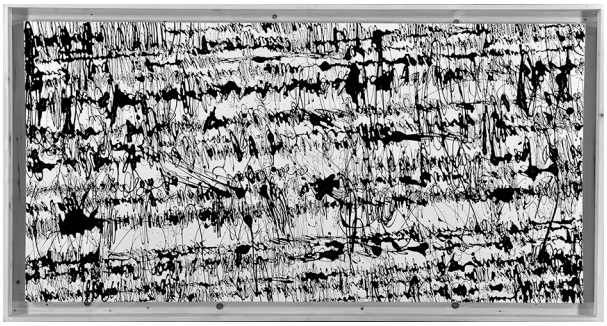

写真８

写真９

た。

残りの作品はスクエアとした。（写真８） 表現方法はドリッピングによるオートマティスム[2]と構成上の計算の元に抑制された手の動きを併せ持つようなもので，それらがシンプルかつ効果的に表情を出すよう心がけた。

完成後，これらの作品が多くの人に鑑賞される機会が得られたことは幸いであった。特に2017年３月に行われたポルト共同研究成果報告展である「GOLDEN ROUND」では，発表したこのシリーズすべての作品を一同に展示することができ，またドリッピングで制作したスタイルそのままの，床置きでの展示を行うことができた。このことは展示作業中のアイディアのひとつで，あらかじめそう考えてのことではないが，『心臓の音』を始まりとして，その鼓動やリズム・メロディー，それらが重なり合い，交じり合ったり合わなかったりすることが作り上げる人間の営みを，多元的に表現することにつながったように思う。その思いが，2017年３月26日に行われた「鑑賞ワークショップ」での鑑賞者の発言によって，多少なりとも伝わっていることが分かったことが大きな収穫でもあった。またこの展覧会では，2017年からの展開を示す小作品を展示することができ，本シリーズが一定の区切りを得たことを示すことができた。

人間や自然が激しく移ろうのにあわせ私自身の意識も常に不安に揺らいでいる。できる事ならば，そうした私の思いや予感のようなものが作品に表され鑑賞者に伝わればよいがそれは非常に難しいことである。制作をさらに自分に引きつけて，制作と自分自身が一体となるためには，事物の面から研究と考察をさらに進めていくことが必要と感じる。

３．陸路から海路へ

林　　亨

これまで本誌に掲載してきた制作ノートから，2017年３月に開催したプロジェクト研究美術グループの成果報告展「Golden　Round」[3]展に出品した近作に関連する部分を抜粋しながら，自作についてと展覧会全般に関する考えを述べる。

本誌第７号掲載の制作ノートで，塚崎氏の展覧会コンセプトやタイトルが「作品を次のステップに展開させる上で大きな道しるべとなる」と述べたが，今回も同様に感じている。塚崎氏は，本研究員となって以来，常にこの３人の研究者の作品と対峙し，そして人と対話し，新しいテーマともいうべき展覧会コンセプトを紡ぎ出してきた。結果的に，いわば制作者との共同作業として展覧会をつくってきたといえる。これは，「Work in Progress」[4]の目指す目的と合致する。すなわち，直訳すれば「進行中の作品（仕事）」を対象とする研究であり，

写真10　GoldenRoundへの出品作

制作途上の作品が作者以外の人間と関わる状況をつくること。そして，その状況そのものを重視することが，このグループの第一義的目的であるからである。もちろん主たる目的は，作品の質を向上させ，作家の造形思考を深め，より豊かな鑑賞行動が生まれること，多くの人に多様な思索と経験を促すこと，そして，社会全体に何かしら貢献できることを期待している。

今回の展覧会タイトル「GoldenRound」は，前回のタイトル「Songline」[5]と強いつながりがあると捉えた。単純にいうと「陸から海へ」あるいは「陸路から海路へ」のつながりであろう。ただ，それは平面的なつながりではなく，もっと複層的なつながりがあると感じたのである。そしてそこに通底するのは「水の道」である。今回も自作のタイトルは「心を浮かべてーみずぶくろ」シリーズである。「初めから人間にあったと思われている心の後進性についての問題意識を喚起する装置を作りたい」[6]という目論から始めた本シリーズ作品は，心の問題から水の問題へとシフトしている。心がなかったとされる時代の人間は，神の声を拠り所に暮らしていたという[7]。水の道は，意志を持たない水が，地表だけでなく地中深く，意思を持つように縦横無尽に，何か強い見えない力，神の力のようなものによって浸透していく。あたかも心を持つ生命体のように。その様子は，「主体たる人間の存在を脅かす」心を「一度人間から放つ」状態を喚起させようとした「心浮かべて」という状態[8]を象徴

的に見せているように感じるのである。

古くから土地に根ざした人間が作った伝説的な陸路と大航海時代に人間が作った海路，遠い世界の伝説のような話しと自作がつながる不思議さ，おもしろさを感じた展覧会となった。それは，塚崎氏を含む本研究メンバーの相互作用に依るものが大きい。

Ⅳ. 最　後　に

今回の報告展及び関連行事を通して，改めて考えたことは，アート作品の成立の可否は，制作者だけに委ねられているわけではないということである。アートは社会的な存在であり，当たり前のことではあるが，あらゆる過程において制作者に，ひと・もの・ことが関わっている。前述した「Work in Progress」という評語で重要な意味を持つ「進行中」や「過程」といった状態を重視した制作。そこに生まれるダイナミズムを楽しみながら，各自の回答を見つけ，そして共有していく。そこに，本研究の一貫した姿勢が通底する。それは，すでにある程度の回答が出尽くしているように見えるアートの問題に対して，自身の制作や分析に即した形で再定義を試みる姿勢である。

今後，本研究をどのように進めるか，実は，グループとしてのまとまりより，個人の問題意識が増幅すればするほど，継続して実施する意義は強くなっていくと思われる。

最後に，報告作品展「GoldenRound　2017」に協力頂いた，北海道新聞の梁井朗氏，関連行事に参加頂いた方，ポルト事務の方に謝意を申し上げる。

（本研究は，ポルト研究の助成を受けて実施された。）

1）アキーラ　アクリル樹脂と油の両方の性質を持った水性アルキド樹脂でできた絵具。クサカベ社から発売。

2）オートマティスム　1920年代にシュルレアリストが提示した芸術的手法および創作理念で，「自動記述」，「自動現象」などと訳される。

3）Golden　Round　1788～1826年に就航していた，米国船による世界一周航路のことで，北太平洋からハワイを経て，広州，ボストンと回っていたとされる。

4）Work in Progress　本研究との共同研究グループの名称でありコンセプトを表す評語でもある。メンバーは，本美術グループ研究員の大井・末次・塚崎・山崎・林

5）Songline　口承によって世界のことが語り次がれていたオーストラリアの創世期にあったとされる神話に出てくる目に見えない道のこと。

6）本誌第５号

7）ジュリアン・ジェインズ著『神々の沈黙―意識の誕生と文明の興亡』（柴田裕之訳，紀伊國屋書店，2005年）参照

8）本誌第６号